

第3講 現代の若者子供・教育

読解演習

解答

問一 古い学校文化…多様性を否定する
新しい学校文化…多様性を奨励する

問二 エ

問三 イ

問四 A ウ B イ

問五 社会の物差し

問六 ア

問七 ⑥ ア ⑦ ウ

問八 側身近な人からの個別の評価が圧倒的な力をもつために、人間関係の拘束力が強い(三十六字)

問九 ウ

解説

問一 双方の違いが明確になる表現を本文中から探す。

問二 「物差し」は、この文章中で繰り返し用いられている重要語句の一つである。「物差し」は「物の長さを測る道具」であるが、比喩として「物事の価値を判断するときの基準・尺度・目安」という意味でも使われる。

問三 —線③の直後に「平たくいえば、そこでウケを狙えるか否かが、自己評価にあたって重要な判断材料となる」とあることから考える。

問四 A 「結果を待って初めて」を「その時になってみなければ分からない」と言い換えているから、「換言」の接続語を選ぶ。

B 「気分などによって、個々の評価が大きく揺らぐことは」なかったことの順当な結果として、「一時的な評価を過剰に気にかけてたり、それに翻弄されることも少なかった」のであるから、「順接」の接続語を選ぶ。

問五 このように字数指定がない場合は、指す部分を正確に書き抜くことに注意。

問六 ア 社会に安定した価値の物差しがあるから、個々の評価が大きく揺らぐことなく安定していたため「自分はこれでいいのだ」と確信できたのである。

イ 「個性」を発揮する時代の自己肯定感ではないから、不適切。

ウ 「場の空気」を読む時代の自己肯定感ではないから、不適切。

エ 「我が道を進む」と思うのはまれなケースであるから、不適切。

問七 —線⑥は、すぐ後に「という普遍的な物差し」とあり、—線⑦は、すぐ前に「身近にいる」とあることから判断できる。

問八 直前の一文の内容を三十五字程度にまとめる。原因として「身近な人からの評価が圧倒的な力をもつこと」、その結果として「人間関係の拘束力が強いこと」、の二つを押さえて解答する。

問九 ア 「拘束から解放された」が不適切。現代の人びとは、「人間関係」に強く拘束されている。

イ 「幸せだった」が不適切。この時代は、社会の抑圧力が強く、生きづらくもあった。

ウ 生きづらさのもとが「社会の拘束力」から「人間関係の拘束力」になったので、正解。

エ 「増大した」が不適切。増えたのではなく質が変化したのである。

重要語句

①葛藤……心の中に対立する感情が起こり、どちらを選択しようかと迷う状態。

例文→子に厳しく接するかどうかで、葛藤が生じる。

②蔓延……(病気や良くない風潮などが) 広がること。はびこること。

例文→不潔な地域で、伝染病が蔓延する。

③翻弄……思うままにもてあそぶこと。

例文→彼女のきまぐれな振る舞いに翻弄される。

④拘束……行動の自由を制限すること。

例文→アルバイト先で、早朝から深夜まで拘束される。